

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470501293		
法人名	有限会社 レモンの里		
事業所名	グループホーム・ レモンの里		
所在地	三重県津市神納418-1		
自己評価作成日	29年3月1日	評価結果市町村提出日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_2016_022_kani=true&JiyosyoCd=2470501293-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	評価認証推進機構株式会社		
所在地	三重県四日市市桜町3690番地4旧三重ソフトウェアセンター3階		
訪問調査日	平成29年 3月 24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

『健康とオープン』を基本理念とした、自由で豊かな暮らしの実現。 屋外へ出る事が元気の源と考えて、散歩・外出を積極的に支援。 利用者も・家族も・職員も、介護の既成概念にとらわれない暮らし。 各人が自分の力を発揮し、ごく普通に自宅同様の暮らし。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

レモンの里の玄関を通り抜けると、廊下の先に喫茶店のような作りの部屋があり、家族やボランティアが思い思いに利用者と集い朗らかな話し声や笑い声、歌声も聞こえてくる。緑豊かな200坪のガーデンがあり、檸檬をはじめ、多くの果樹や花、野菜が植えられている。利用者は、庭の景色を眺めたり、散歩や収穫等を楽しんでいる。「ここは、いつでも気軽に訪問でき、暖かく迎え入れられる。」と家族にも定評がある。多くの利用者が、ここで家のように暮らし、看取られ、見送られ、庭の檸檬の木の根元に眠る。毎年遺族も招待され、メモリアルが執り行われている。レモンの里は、利用者や家族にとっての「家」であり、「故郷」であり続けることを目指している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の支援を受け、また、地域に発信するという理念を礎にし、現実の高齢化に対応しながら、介護・自立に向かっての理念に沿った実践を目指している。	理念の実践に向けて、職員一人ひとりが「自分だったらこんな介護を受けたい。」と考えることで、自ら答えを出すように導いている。また、職員が安心して働ける職場創りは、理念の実践の礎と考えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	利用者の暮らしが、テレビなどで報道された。この中で当ホームの協力体制が紹介された。これにより、地域との交流が進んだ。	「地域の中で暮らす」事を目指し、地域住民に事業所主催のコンサートに参加して貰ったり、映画会やガーデンパーティに来て貰ったりしている。また、地域に出前コンサートをしたり地域行事にも積極的に参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	三重県アルツハイマーデー・京都での国際アルツハイマー大会での発表・大学・専門学校大会などの場での発表を通じ、地域の方々にお伝えしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議も形式的なものではなく、笑顔の写真を活用した日常生活の報告が主体となっている。利用者本人が参加。家族も自由に意見を述べている。職員は即時実行する体制にある。	会議は利用者も参加される。家族や地域の方の参加しやすい日程の配慮がなされている。現場職員・利用者含め、参加者が多く、家族にも好評である。要望や意見に対する対応が早い。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	三重短大・三重大学・県の主催する研究会等で講演。 学生の見学・実習受け入れ。 三重大学ゼミの見学受け入れ。 運営推進会議には包括・津市職員参加。	三重大学からの依頼で、ドイツの留学生の見学を受け入れたり、大学・地域の交流会での講演依頼がある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	無施錠。フェンスなし。 日課の自由。 利用者が自由に行動。 職員が常に検討会を行っている。	居室や庭から目田に外に出られるので、閉塞感がない。また、行動を抑制しないなど、普段から不穏にならない対応を職員が心がけており、無断外出の可能性のある人に集中して注意を払う事で無施錠を実現している。	拘束、施錠、強制・抑制は心の面での制約に繋がりがり生活寿命を縮めると考え、日頃から、「拘束しない」ケアに取り組まれているので、「拘束のない安全確保策」の更なる向上を望みたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員が生きがい・働きがいのある環境に居られるようにしている。 職員を大切にすることで虐待はなくなる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護を主目的とした三重県福祉セミナーに実行委員として参加している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には親族に集まってもらい、十分な説明をしている。 事前に本人が来園見学し、一緒に食事をし、本人の希望を確認している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族を単にお客様として考えるのではなく、レモンの里の一員として行事等に参加をしていただき、そのような場でも家族の率直な意見希望を聞くようにしている。	家族の率直な意見を聞くための信頼関係創りに力を入れ、色々な家族参加行事を催し来訪を歓迎している。利用者や職員と一緒に食事やおやつを楽しんで貰い、親しい関係創りの中で意見を聞く工夫をしている。	認知症が重度化するほど、家族の意見や協力が重要になってくることに鑑み、家族参加の重要性の理解を得るための取り組みを、今後も続けて頂きたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月初にケア会議を開催している。連絡票も活用。責任者は、常にホームに居て、下位職員とも常に話し合い、頻繁に意見交換を行っている。ケア会議には、職員から事前に文書での提案がなされ、殆どが実行に移されている。	経験の浅い職員の意見を積極的に採用、提案が実行に移されるため、考慮された提案がなされる。提案が上席者に恣意的に曲げられることなく、細部に渡り検討されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員が予算枠を持ち、即断で使用できるようにしている。 職員が利用者・家族の人々にダイレクトに寄り添える体制を作っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ケアの方針などについて、職員からの書面での意見聴取も行っている。内部研修は随時行い、外部の研修も活用している。困難事例は即時職員が集まり、検討・改善している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	レモンの里交流コンサートや・協議会役員としての交流など積極的に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	通所サービスの利用者に困りごと・悩みが多くあり、その解決のために話し合う機会を多くとっている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の希望・本人の希望を徹底的に聞いている。 本人・ケアマネ・家族と事前に話し合っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居決定前に本人が見学に来園。 自宅訪問の実施。 病気等の対応の検討を行い、本人に適切と思われるサービスが提供できるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	レク・リハ等よりも、暮らしの中での支え合いが必要と考えている。食事作り・洗濯等のシーンで、入居者の方々と職員の暮らしのための共同作業が当然のように行われている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	行事・食事づくり等の場面で家族も一緒に準備をしている。 2組の家族が職員として働いている。母・娘の関係や祖母・孫の関係も保持して共に本人を支えている。家族の絆も保っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ふるさと訪問・法事等には職員が同行。家族の個人的な支援に応じている。 友人・姉妹・子・孫・ひ孫、その配偶者等多岐にわたって面会に来られる。	利用者の思い出の場所や墓参、家族の慶事参加の為に海外旅行支援等、利用者の外出や家庭内行事参加支援に力を注いでいる。 また、家族がいつでも面会できるよう夜間でも自由に来訪できる体制を取っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の会話が多く見られる。 個人として自由に暮らすことによって、逆に散歩・外出等、互いに協力・助け合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	開設以来13年で9名の方の看取りと葬儀をホーム内で行った。 (最小限の医療と手作りの家族葬) 毎年5月に慰霊祭。 家族の方はボランティアに移行します。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の生活のあらゆる意思決定の場面で、本人よりも家族の意向が優先されることが多くあるが、本人の選択や意向を大切にしたいと考えている。	重度化に伴い、本人からの希望を引き出し辛くなってきたが、なるべく一人ひとりの思いを汲み取り、利用者が『目を輝かせる』ための対応を心がけている。適切な声かけがなされていると家族からの定評である。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族の方と入居前の暮らしぶりを話し合うようにしている。 人によっては毎週帰宅されたり、家族との外食も楽しめる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	『遊び心』を大切にしている。 自発的な行動を促している。 看護師と協力して、個々の人の状態を把握し、かかりつけ医師にも報告している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月1日にケア会議を行っている。事前に書面で職員の意見を聴取し、即断できる時には即時実行している。	ケア会議をベースにして家族とも話し合い、家族とのすり合わせをしながら介護計画を作成している。経過を細かく記録するフォーマットがあり、きめ細かいモニタリング(経過観察)が為されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者ごとに個別書式としている。 記録書式は月2回見直しをしている。 ケアの重点項目が把握しやすく、変化が良くわかるように記入方法を工夫している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本年度は入院者が4名と多かったが、可能な限り家族と職員が協力して付添に当たった。結果、病院で最期を迎えられた方がレモンの里へ帰り、家族と共に看取りをすることも出来た。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティア多数。 神社・保育園・消防・リージョンプラザ・県文化会館・三重大学とも協力。(AED講習など)		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科・整形など複数の診療機関で受診。 かかりつけ医が随時往診。 職員(責任者)が受診に付き添い、医師との連携をとっている。 看取りの実践。(9名)	かかりつけ医との信頼関係が保たれている。 減薬・薬の変更など、家族・職員が希望を述べ、医師がそれに意見を加えて処方される体制が出来ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤看護師2名。 過去9名の看取り(穏やかな最期)を行った。 受診には職員が付添い、結果を看護師と共有。 看護師の夜間緊急対応体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時も職員の長時間付添・24時間付添などをおこない、直接医師とも相談し、早期退院が出来た。 入院による認知症進行も防止した。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	皆が、レモンの里で最期まで居たいと希望。 9名の利用者が病院へ行かずに、家族や職員の見守りで静かな最期を迎えた。家族が定年退職し、自宅介護が可能になった利用者の退所支援も行い、長野県まで職員が送った。	契約時に看取り方針を伝え、文書で確認しており介護計画にも盛り込まれている。本人にも入所時に分かり易く説明している。折に触れ、また体調変化や重度化する毎に家族と繰り返し話し合い、方針を共有する過程を大切にしている。	看取りと同様に退所者のフォローも大切な役割です。 今後とも、1人ひとりの利用者に適した形でのフォローの取り組みを続けることを願います。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員間で日常的に話し合い、訓練も行っている。 職員の気づきで急変時早期回復が出来た。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	緊急避難用に床が高めのコンクリートで舗装されたビニールハウスを設置。 場所・経路も確認している。 正職員4名が500m圏内に居住し、緊急対応体制。 近隣も協力。	認知症高齢者の避難については、受け入れ態勢まで踏み込んで考えており、連合自治会長と協議の上、避難場所の環境・経路の不安を考慮して、留まることが最善との結論に至り、避難用ハウスを設置した。	食堂フロアから大きな掃き出しになっており、スムーズな避難が十分可能であるが、夜間や緊急時の居室から食堂への避難経路や方法に更なる検討をお願いしたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	平素から家族との会話の機会を多く持ち、その中で家族の思いや本人の思いを聞き取り、個人の持つ誇りや大切にしてきたことを職員が意識づけして対応している。	「少しの尊敬・少しの愛情・少しの援助」で誇りやプライバシーを守ることに繋がると指導している。利用者の持つ人生観や価値観に対する理解と適切な評価を、会話材料として活用することを心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	コンサート、墓参・法事など積極的に出席。随時外出。（職員・家族・ボランティア同行）施設用の買い物時にも利用者参加。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日課や、献立表などスケジュール立てされた流れを排除し、その日の体調・天候や季節に合わせた暮らしを支えている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類の調節など、季節・天候にあわせて行っている。 職員が染髪実施。 家族に入居者の爪切り支援をしていただいている、		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	業者に頼らず、職員で調理をしている。食材は職員が買い出しに行き、入居者が台所へ運ぶ。下ごしらえなども入居者が手伝い、季節感あふれる食事に行っている。レモンの里のガーデンの果物も活用している。	『食べる意欲』を引き出すためのこだわりがある。季節感を大切に、普通の家と同様、生野菜や刺身を多用し、「必要以上に刻まない・柔らかくしない」ことで、食欲喚起を図っている。職員も同席し、同じものを食べている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の量やカロリー、バランスなどは職員側で押し付けるのではなく、本人が取捨選択して行くことが必要と考えている。自身の持つ力で食事をしていただいている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事後洗面所へ誘導し、口腔ケア。 毎週ポリデント。自立度の低下により、毎食・完璧な口腔ケアは難しくなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	人によりトイレのサインが異なるので、それぞれの人の行動パターンを意識して観察し、自立に向けた対応をしている。	利用者の高齢化重度化が進み、排せつの自立支援は難しくなっているが、職員は、そっと立ち上がったたり、職員をじっと見たり、そわそわしだす利用者の様子を感じとり、自然な感じでトイレ誘導し支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘が不穏や帰宅願望に繋がるので、時には薬も使うが、魚・野菜・肉を豊富にした食事で便通を図っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個浴。マンツーマンの入浴。一人ひとりお湯を替えている。ゆったりと入浴を楽しんでいただいている。(一人当たり一時間前後)時間帯の希望には浴えていない。	大きな窓から庭の木々が臨める風呂には、普通浴とリフト浴があり体に負担がかからないよう工夫されている。入浴嫌いの利用者の経過記録用紙には、「入浴してもらおうための工夫」記入欄がある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間・起床時間は自由。 居室内温度は、その日によって外気温とすり合わせて調節している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	減薬を基本目標にし、食事や環境づくりの中で適切な服薬を目指している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外出することを基本目標にしている。役割の配分をしている。自由に読めるように新聞・書籍をテーブルに置き、自室に持ち込んで読むことも可能としている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	ふるさと訪問を軸として外出・買い物・家族との外出・ボランティアとの外出・ガーデンの散策・帰宅・宿泊など多様に対処している。(墓参・旅行・祭礼・コンサート)	本人が『行きたい』と思う外への憧れに繋がる写真を随所に掲出。外出意欲を高める努力をしている。利用者の体力に応じて個々に対応している。体力低下で歩行困難な方にも外気に触れてもらおうと、ガーデンやデッキをフルに活用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望により、小額の金銭を持っているが、平素の生活に満足され、実際にはこの小銭も使う必要が無い。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があれば、手紙を書いたり、電話も無料で使用できるようにしているが、現実には本人から架電・出状することはなく なっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建物全体に生花・観葉植物類を豊富に配置。テーブルにも、おもちゃや書籍生花が置かれている。 介護施設らしくない住空間をめざし、プライベートな空間を作り、居心地の良い住まいとなるように工夫している。	昔懐かしい日用品や花が飾られ、洒落た喫茶店のような大きな食堂には、職員手製の大きなラウンドテーブルがある。席に着くと隣や向かいの人とほど良い距離感があり、顔は見えるが手元は見えないよう配慮され、落ち着ける工夫が為されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間にも、プライベートな空間があり落ち着ける。 他の人と離れて過ごせる場所がある。 ガーデンにも自由に出られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	壁に写真を展示したり、施設らしくない居室づくりをしている。個人の嗜好に応じた家具・調度品があり、各個室が特徴のある雰囲気になっている。	クッション性の高い床材を使用し、家族に木製の家具やなじみの調度品等を持ち込んで貰い、一般家庭の居間を思わせる雰囲気創りを心掛けている。可能な限り介護用品で埋めてしまわないよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	危険物を排除することが安全につながるわけではなく、それを認識していただく事で自立や安全性が確保できる。 そのために配色や置き場所を工夫して生活感を出している。		